

## 『テオチム農家』の切り拓く作品空間：循環する時間・大地・家を通して

田中，陽子  
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5354>

---

出版情報：言語文化論究. 13, pp.109-119, 2001-02-28. 九州大学大学院言語文化研究院  
バージョン：  
権利関係：

## 『テオチム農家』の切り拓く作品空間

— 循環する時間・大地・家を通して —

田 中 陽 子

世界とは、その構成の法則を私が自分の手中に握ってしまっているような一対象なぞではなくて、私の一切の思惟と一切の顕現的知覚とのおこなわれる自然的環境であり領野なのである(…)人間はいつも世界内に在り〔世界にぞくしており〕、世界のなかでこそ人間は自分を知るのである。常識の持つ独断論や科学のもつ独断論から離れて私が自分自身に帰るとき、私がそこに見いだすものは、内在的真理の奥房ではなくて、世界へと身を挺している一つの主体なのである。<sup>1)</sup>

M. メルロ＝ポンティ

1940年から41年という、第二次世界戦争の直中に書かれたにも関わらず、そして、直接の執筆動機がナチによるパリ占領に対する憤りであったにも関わらず(このことについては拙論<sup>2)</sup>で述べた)、『テオチム農家』の作品世界は、それより遙かに時間を遡り、18世紀末あるいは19世紀はじめ頃かと思われる、癡陞の山復で、大地を耕しながら生きる主人公パスカル(一人称形式の‘私’)の物語となっている。

ボスコはこの作品の制作に至る当時の精神状態を次のように、後年、回想しながら述べている。

「祖国の瓦解の中で大地を除いて何が残っているだろうか？ それは、小麦の、そして葡萄の収穫の土地であり、羊が群れをなす土地である。小麦、葡萄酒、牧場、動物達がいともこの大地を豊かにした。征服されているとはいえ、その大地は強い。なぜならおまえが愛しているあのひろがる畑地があり、そして、遠い昔から、その大地に粘り強く働きかけ、自分の理性、忍耐、肉体、道具をもって自然の力に対抗してきた人々がいる。彼らは、此の大地を荒れ狂うままにした時大地が齎らす悪を知りつくしている。それゆえ、この制御された自然の力、肥沃な畑地を、犁で耕された大地をうたいあげよう。何も変わらないのなら、救いが齎されるのはそこ、すなはち、大地からだ。(…)それはすでに、(この悲惨な状況に対する一筆者加筆)勝利となる。」<sup>3)</sup>

そして、それ迄、温めていた心理的探偵小説的な構想は覆り、「意図的に複雑な情痴事件ではなく、人間を巻き込んだ大地そのもののドラマとなっていった」<sup>4)</sup>とのべ、「大地」というテーマの周りで登場人物も生まれ、その過程でテオチムが登場したと述べている。テオチムとは、主人公(‘私’)の暮らす農家である。プロヴァンス地方の農家は名前を持っているが、ボスコはその名前のついた農家を作品のタイトルにした。テオチムという名については次のように述べている。

「テオチムとは啓示的に浮かび上がった名前である。(…) テオチムは農村のカミで、人々の間から生まれ、人間の守り神だが、それ自身からだを持っており、その中に魂を宿している。(…) 登場人物の一人であるが、すべての登場人物の中で最も重要である。」<sup>5)</sup>

『テオチム農家』にはストーリーとして、主人公パスカル(‘私’)の土地への定着を阻害しようとする従兄との葛藤と彼の死をとおして和解へと至る物語と、従妹ジュヌヴィエーブとの再会と、告白に至らない愛の燃え上がりと別離、別れに伴う喪失感を土に生きることによって克服するという物語の要素がある。が、同時に、先の引用した文の中でポスコが、「大地そのもののドラマ」、又テオチム農家について「すべての登場人物の中で最も重要である」と述べていることに象徴されるように、基本的には人間世界の事象や関係性だけを主たるテーマとする多くの文学作品と一線を画して、この作品においては、人間は自然の一部として存在し、又人間から自立した存在としての土地や家やそれらを取りまく動・植物を含めた自然、それらと登場人物との緊密な相即不離な相関関係ともいえるものが作品世界の内実をなしている。それは、作品の舞台が一貫してテオチム農家とそれを取りまく自然の中にあること、人間にみ関わる事象(心理や社会等)以外の要素(家・気象・香り・土・様々な自然の現象等)に多くのページが費やされているという事だけによるのではなく、そうしたものが、作者の世界観を反映して、人間中心主義から解放された表現で捉えられており、又、人とそれらの関わりの緊密さ・相即不離性も、人間中心主義を脱した相の下に特異な文体や表現で提示されている事による。勿論『テオチム農家』の作品全体を、人間中心主義から解放された独特の文体や表現の特異さ、自然と人間の関わりの相即不離性のみが支配しているわけではない。しかし、この作品を読みながら、我々が感じる自然やものに対する原初的感覚は、作者の世界観を反映したそうした様々な要素に負うところが大きい。

本稿では、先に述べたストーリーの展開とは別に(ストーリーの展開に全く無関係というわけではないが)、そうしたこの作品の特質をなしている幾つかの要素を、作品の中の‘時間’、‘大地’、‘家’を通して見ていく。その作業そのものが、人間と人間を取りまく世界との本源的で原初的感覚を忘れてしまった記憶喪失状態の我々に、原初的感覚の記憶を取り戻させる事になるだろうし、又そのことが、我々現代人が陥っている人間中心主義的世界観から我々を解放することになるだろう。ポスコの作品を読む喜びはそのことに尽きるといっても過言ではない。何よりも、そのことが、彼の『テオチム農家』創作の眼目であった。すなわち、人間が、とりまく自然環境と緊密な相関関係にあり、人間が決して中心ではない世界を作品として立ち上がらせる事で、科学的と言う名の下に自然を征服し、自然やものとの親密で本来的関係を失った世界と、それ故に、他者の住む土地を武力で侵略する蛮行を行っているナチとに対する彼の抗議の行為であった。

## 1. 作品の時：人間の時を凌駕する時

作品を貫いて、従妹ジュヌヴィエーブとの再会と別れ、農耕生活によるその苦悩からの救済、隣人である従兄との諍いと、彼の死と彼の意志による土地の継承による和解という、結末に向かうストーリーの展開する直線な時間が存在する。しかし、まず作品を読みながら注目すべき事は、作品の中で、季節と月日への明確な言及は頻繁にあるが、年代への言及

が、最後の日記の部分においても全くないことである。

主人公パスカル（‘私’）は、生来植物が好きで、又、農業に関する高等教育もうけ、土への愛とそれがなければ麦がはまっすぐに育たず、上等のブドウでも樽の中で酸化してしまう百姓の知恵を少しばかりは身につけている。主人公（‘私’）は、以前はエキゾチックな植物を求めて海の向こうの遠い国々を経巡ったりしていたが、故郷の土地の魅力に目覚め、生まれ故郷に身を落ち着けた後、10年前から一人でテオチム農家に住んでいる。テオチム農家は母方の叔父から相続した。小作農のアリベール一家4人が数百メートル離れたところに住んでいる。そこは以前はアリベール一族の土地であった所である。現在は土地を所有していないが、彼らは農業をよく知っており、土に生きる人間としては主人公（‘私’）が手本と仰ぐような人々である。（作品の中に「手本と仰ぐ」と言うような表現は存在しない。それは、行間からにじみ出ているだけである。作品には説明したり、解釈したりする言説は極力排除されている。）

登場人物に関しては人間社会にのみ直結するような外見描写や性格描写はほとんどない。アリベール一家について言えば、四季を通して常に何らかの農作業を行っている彼らは、季節の中で生きており、彼らの存在を季節が貫いている。季節と彼らの生活の相即不離性は彼らの魂の形をつくりあげ、そのため彼らは、人間として個々の特徴をもった存在であるよりも、季節が造形する自然物のように、いや自然物としての似通った存在の様相を呈している。

「彼ら家族の魂の形にはその様相や差異というものがなかった。彼らは4人はめぐり来る季節を次々に反映して、人々が冬から夏に移行するように、ゆっくりと、季節が命ずる仕事に従って、粘り強さから勇気へと移行して行った。/ *Les formes de leur âme familiale ne se distinguaient pas de ses aspects ni de ses variations. Ils étaient quatre qui reflétaient les saisons successives ; et, suivant les travaux qu’elles réclament, ils passaient insensiblement de l’obstination au courage, comme de l’hiver on passe à l’été.*<sup>6)</sup>」

常に耕作している土地から眼をあげて遠くを見ることをしない寡黙なアリベール老人は、「年をとるにつれ、蜜蜂と一緒に過ごす事と父母達が埋められている場所のそばで時折時間を過ごすことに最も深い喜びを見いだしているようだ。/ *On sent qu’en prenant de l’âge, il trouve son plaisir le plus grave à vivre un peu dans la compagnie de ses abeilles et dans le voisinage de ses morts.*」<sup>7)</sup>

人は年老い死んでいく。だが、大地に埋められる種子と同様死者も又あらたな形態をとって再び生に立ち返るのを待機している。又死すべき人間も大地を通して死者とつながっている。そうした死者達とのつながりを感じて生きているアリベール老人は生命の循環する永遠の現在に住む根源的な幸福の中にいて平穩である。主人公（‘私’）はそのことを羨ましいと思う。彼のそばにある、墓碑銘も半ば消えかけた石の墓は私を悲しくさせない。

人間をこえた宇宙のリズムである自然の循環の中に深く入り込んで生きているアリベール一家の農作業の時間が作品の基本的背景をなしている。作品の遠景には季節の草の生育状況に従って場所を変える移動牧畜をおこなっている羊飼アルナヴィエールもいる。

主人公（‘私’）は、結末へ向かう出来事としてのドラマの直線的時間に取り込まれ、「人

称的な生<sup>8)</sup>も生きるが、植物採集などをする事によって、又アリバール一族と農作業をすることなどで、「人称的な私の恣意に左右されず人称的な実存が前提とする非人称的な地平<sup>9)</sup>」をも生きる。そうした存在の往復運動をしながら、様々な試練の末、彼らのように、「自らの行為が季節の要求に常に一致しているのに気づく。/ Je me suis toujours bien trouvé d'accorder ma conduite aux exigences des saisons.<sup>10)</sup>」そして以前より更に農耕作業に果敢に取り組むことによって、自分の欲求によって土地に働きかけるのではなく、季節のリズムという人間を超えた自然のリズムにしたがって農作業をし、土地の恵みを受ける。

エリアーデは、「農業は宇宙のリズムに統合される儀礼として聖性をもった行為だ」と述べているが、主人公（私）は、農業を通じて太陽がすべての恵みの源泉であることを改めて強く認識し、自然の循環する時の中に深く生きることになる。

読者も、（ここでは数例しか挙げなかったが）作品の中の独特な文体や表現の特異性によって作品の中に立ち上がる循環する時間を共有することになる。

## 2. 大地

テオチム農家を取り囲む大地もこの作品に遍在し、様々な位相でたち現れる。その幾つかを取り出してみよう。

荒れ果てたテオチム農家を取り囲む「土地をアリバール一家が目覚めさせた。/ Les Aliberts réveillèrent les terres.<sup>11)</sup>」通常生き物に対して使う‘réveiller’という言葉は、この場合、比喩として用いられているのではない。土地はこの作品のなかではそれ自体生き物として存在する。それは、たとえばジュヌヴィエーヴについて‘une créature de vent’、アリバールの娘フランソワーズについて‘une créature calme’とあるが、同じように土についても、「この奇妙で手に負えないが、時折母でもある生き物 / cette créature étrange et terrible, qui est quelquefois une mère.<sup>12)</sup>」という表現にも見られるように、人と大地が全く同じ位相でとらえられている。

それ以上に、土地は「動物や人間に食物をあたえる何百年と続く使命 / sa vocation séculaire de nourrice des bêtes et des hommes.<sup>13)</sup>」を果たしている存在であり、又、人の魂を癒す存在でもある。

「この土地は強く、魂の糧を与えてくれる。私の魂はそこから静謐さを養分として受け取っている。/ Cette terre est forte et nourricière d'âme. Mon être s'y alimente des sources calmes.<sup>14)</sup>」

又、大地は人間が農業を放棄した場合に手強い同伴者へと変貌する存在でもある。

「農業の束縛から自由になった土地は安心できる同伴者であることはほとんどない。土地と長く対等につきあうにはことのほか堅固な魂を持っていなければならない。/ La terre, libre du joug agricole, est rarement d'une compagnie rassurante. Il faut, pour soutenir un long tête-à-tête avec elle, une âme singulièrement robuste.<sup>15)</sup>」

「アリバール一族は土地を慎重に愛している。彼らの畑仕事の力が土地のもつ人間を

飲み込む力から彼らを免れさせている。/ pour la terre ils l'aiment avec prudence. La vertu de leur laveur les met l'abri des envoûtements.<sup>16)</sup>

アリベール一家の魂を季節が造形しているように、長い間対峙してきた大地が彼らの存在の鑄型をつくりあげている。

「アリベール一家は土地の欲求に従って形作られていた。/ Les Aliberts étaient modelés aux exigences de la terre.<sup>17)</sup>

大地は又感情を持った生き物としての側面を見せる。特に人間が土地に対して傲慢になったときには、厳しい側面を見せる存在となる。

「土地は屢々厳しく近づきにくい顔を見せる、特に自分の仕事のあかしを土地に押しつけるためののみ土地に挑む人間に対してそうである。/ Mais souvent elle montre une figure rude et d'un abord difficile, surtout à l'homme de labeur qui n'affronte guère que pour lui imposer les marques de son travail.<sup>18)</sup>

大地は私にその美の発散で感動を与える存在でもある。

「土地はその朝美しかった。土地がいつも私にとって美しいのは本当である。/ La terre était belle ce matin là. Il est vrai que pour moi elle est toujours belle.<sup>19)</sup>

大地は人と交歓しあう存在でもある。それは双方向性のコミュニケーションであり、いつも人間がコミュニケーションの主体というわけではない。

「私は灼熱のもとで特に生きている。その時大地は私にその熱い思いをいつもよりたやすく伝え、私は大地とコミュニケーションする。/ Je vis surtout au moment des grandes chaleurs. Alors la terre me transmet plus facilement son ardeur ; et je communique avec elle...<sup>20)</sup>

土地はまたやすらぎを与えてくれ、主人公（‘私’）がそこから離れて生きることはできないと思うほど存在に深く関わっている。

「大地はやさしかった。私は、それから長く離れて生きていくことはできない。/(...) la terre m'était douce et je ne puis longtemps vivre loin d'elle.<sup>21)</sup>

そしてなによりも土地は、永遠回帰という人間の根源的な欲求を満たしてくれる存在である。

「それ（土地）は、小麦の成長やブドウの木が緑色になる事だけが、農業の偉大さと隷属性と格闘している人間に与える厳かな緩慢さと永遠回帰というの生来の欲求を満足させる。/(...) elle satisfait à ce besoin inné de lenteur solennelle et d'éternel retour que seule la croissance du blé ou le verdissement des vignes offrent à l'homme qui est aux prises avec la grandeur et les servitudes agricoles.<sup>22)</sup>

主人公（‘私’）は、大地による救いと大地につながって生きている事実を改めて確認

する。

「大地は私を救ってくれた。私の存在はこの大地につながっている。/ *La terre m'a sauvé, et je suis resté attaché à la terre.*<sup>23)</sup>」

このように大地は、生きた存在として、そして精神性や意志を持った独自の存在として、作品の中に登場人物のように存在し、主人公をはじめとする人間の存在に深く関わりながら作品空間に遍在している。

### 3. 家

バシュラールは、どんな質素な家でも自然の中にある家はコスミックな力をもつ特権的存在(un être)であり、人々に世界の中の一隅(notre coin du monde)をもたらすとどべている<sup>24)</sup>が、自然のなかにある家であるテオチム農家も、人が住むための‘もの’ではなく、特権的存在(un être)として、通常の知覚を超えて、様々な位相のもとに作品の中にあり、登場人物の存在と緊密に絡み合っている。

主人公(‘私’)は会ったことのない叔父から相続したこの家に10年来一人で住んでいる。しかし、次の文にあらわれている‘coexistence’という言葉が示しているように、主人公(‘私’)には、家を物としてみる意識、更に、通俗的な意味での所有の意識はなく、家との共存の意識があるだけである。

「10年の共存生活で我々はお互いに余りにも結びついているので、時折私は本当に私が家と土地を所有しているのだろうか…と自問するときがある。/ *En dix ans de coexistence nous nous sommes mêlés tellement, l'un à l'autre que quelquefois je me demande si j'ai vraiment une maison et une terre...*<sup>25)</sup>」

山の畑の直中にある家は山のもつ野生の力を持った自然物の側面を具えている。

「テオチムはその基底部によって、水によって、またその壁が作られている石によって山に属している。/ *Théotime tient déjà à la montagne, par les racines, par les eaux, par la pierre dont on a bâti ses murailles.*<sup>27)</sup>」

そして四季の自然の厳しさから人間を守ってくれるその家は、近づく嵐に、生き物ごとく、そして人間的力を漲らせ、強い意志で身構える。

「テオチムの方に歩いた。テオチムは、身を固くして、肩を寄せあい、大地の中に深く踏ん張って、人間的力を漲せたその薄暗く薄紫の巨大な塊で、嵐に身構えていた。/ *Je marchai vers Théotime qui s'est resserré sur lui-même, regroupé, enfoncé dans la terre, qui offrait sa masse sombre, violette, toute pleine de force humaine et de volonté dure, à l'approche de l'orage*<sup>27)</sup>」

共存している家に私は情緒的、親和的關係を感じている。

「私は私の古い家と広い畑地の真ん中にぽつんといるような気がしていた。母親と2

人だけにいるようだと思った。/ Je me sentais (….) avec ma vieille maison perdue au milieu des champs, je me disais : – mais maintenant, c’est comme si tu étais seul avec ta mère.<sup>28)</sup>」

親和的關係にとどまらず、私と家は一体感すらなしているときがある。無意識的相互感応状態とでも言える状態すら私と家との間に生じる。

「私とテオチムはもはや一つの魂をなしているだけだった。/ Théotime et moi, (….) nous formions plus qu’une âme.<sup>29)</sup>」

主人公（‘私’）とテオチムとのかかわり合いは、私の能動的働きかけによって常に生じるのではなく、双方向的である。あるいはむしろ家の方が行為の主体になっている場合も多い。

「家はまだ土地の起伏の中に隠れていた。自分の存在を私に知らせるのは家の方である。/(….) le mas est encore caché par un pli de terrain, c’est elle qui m’annonce sa présence.<sup>30)</sup>」

「私が愛しているテオチムは、自分の眠りから起きあがらせた私に執着した。/ Théotime que j’aime s’est attaché à moi qui l’ai relevé de son sommeil.<sup>32)</sup>」

家は人間とは独立した、精神的性を湛えた存在としてたち現れることもある。

「それは樹木と畑の直中に休んでいた。その平穏さが私を驚かせた。Il reposait au milieu des arbres et sa tranquillité m’étonna.<sup>31)</sup>」

家は‘私’に良識ある忠告をしたり、私の行動の規範をあたえる存在でもある。

「テオチムはサンセルグに行くなと私に忠告していた。それは良識ある誠実な忠告であった。/ Théotime me conseillait de ne pas aller à Sancergues. C’était le conseil de bon sens et de l’honnêteté.<sup>32)</sup>」

「そのように私にあって考えたり、愛したり、望んだりするのはテオチムである。私はその掟が私の意志に理由を少しでも与えることなしに、なんの行動も起こさない。その掟の理由は常に正しく、崇高である。/ Ainsi en moi c’est naturellement Thétome qui pense, qui aime, qui veut ; et je n’entreprends rien sans que ses lois m’imposent, peu ou prou, à ma volonté, leurs raisons, qui sont fortes et nobles...<sup>33)</sup>」

家が高い精神性を宿した存在として、さらに聖性を帯びた存在として主人公（‘私’）に示現する時もある。

「テオチムというこの精神的建造物 / l’édifice moral de Théotime<sup>34)</sup>」

「それは私に精神的姿、賢明で宗教的な一種の形として現れていた / il (….) me présentait comme une figure morale, une sorte de forme sage et religieuse...<sup>35)</sup>」

「あらゆる神々をその中で守っている父性あふれる堂々とした塊 / (….) cette masse paternelle qui arite tous les dieux.<sup>36)</sup>」

「テオチムが隠している霊的力が強く現れているのを見て、‘私’は圧倒された。/(….)



une puissante expression du génie caché de Théotime. J'en étais bouleversé.<sup>37)</sup>」

建物である家のような‘物’が自然と同じく動物性や高い精神性・聖性を宿しているとする感性は、キリスト教が公の宗教となる以前のヨーロッパ社会にも存在していた。すべての物質は生きていくとするアニミズム的世界観やすべての物質が霊的なものを宿しているという汎神論的な世界観である。そうした世界観は教会によって、後には、科学的機械論的自然観によって否定されたが、実質的には民衆の生活の中に生き残っていた。20世紀の科学文明の普及は、そうした民衆の間に生き残っていた世界観をも駆逐しようとしていた。ポスコは生来の気質によって、子供時代の自然環境に培われた感性によって、又古代ギリシャの文学に親しむことによって、アニミズム的かつ汎神論的な世界認識を持ち続けており、彼の作品は自らの世界認識を文学的に昇華させたものとなっている。

以上、『テオチム農家』における時間・大地・家に関する部分の幾つかを瞥見してみた。ここで取り上げたのはわずかに過ぎないが、作者の人間中心主義から解放された世界観が、通常の規範から逸脱して、大地や家を主語とする文体や表現の特異性の中に、又、季節や大地や家と人間との関わりの緊密さに反映され、人間中心主義から解放された文学空間を創出していることがわかる。そこでは人はとりまく物や自然との深い絆の中で生きており、社会の中の存在であるより、まず自然の中の、そしてその一部でしかない存在であり、そこでは人間が常に主体であるとは限らない。社会と他者としての人間との関係のみを人間の世界とした実存主義が隆盛を極めている時、ポスコは、自然や物との絆の中での人間に関心を寄せていた。それは、社会問題を拒否して自然を逃避の場所とすることではなかった。そのような目的ならば、人間中心主義から解放された独自の文学空間を立ち上げさせることはできなかったであろう。ポスコは、自然との本源的な絆の中に生きていない人間の疎外状況が根源的な問題だと考えていた。彼の作品はそうした疎外状況への彼の意識的な異議申し立てであった。そのことは、1949年に彼が次のように述べていることにも伺われる。

「我々に作り出されているこの不条理で耐え難い世界の直中であって、人々が避難できるような磁場を、ポエジーの聖なるもの堆積物を保持しているような磁場を創り出すことが必要だ。そのことによって、ポエジーをより守ることができる。ポエジーは守らなければならない。それが、真の〈アンガージュマン〉であるが、表に現れない密かなものだ。/ Au milieu de ce monde absurde et atroce qu'on nous fabrique, il me semble qu'il faut créer ses sites magnétiques où on puisse se réfugier en quelque sorte immatériellement, ceux qui conservent le dépôt des objets sacrés de la poésie. De là on peut mieux la défendre, il est des 〈engagements〉, réels, mais qui sont secrets.<sup>38)</sup>」

本稿でみた要素以外にも、沈黙、人間に開示される非人称的地平、自然現象や動植物に関する表現の特異さ等様々な要素が重奏して『テオチム農家』の作品空間を作り上げている。次回はそれらを通して『テオチム農家』の新たな特質を見ることにする。

## 註

- 1) 『知覚の現象学 I』竹内・小木訳, みすず書房, 1975, pp.17-18  
Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, TEL, 1987, pp.XI-XII
- 2) Henri Bosco (1940.6-1941.7)  
—‘神々に満ちた’プロヴァンスから作品『Le Mas Théotime /テオチム農家』へ—  
「独仏文学研究」第44号 187～215頁, 平成6年9月
- 3), 4), 5) Henri Bosco, Genèse du *Mat Théotime*, in Cahiers Henri Bosco 22, 1982, p.18-19
- 6) Henri Bosco, *Le Mas Théotime*, Gallimard, folio, 1952, p.44
- 7) Henri Bosco, *Ibid.*, p.111
- 8), 9) 廣松渉・港道隆『メルロ＝ポンティ』岩波書店 1987 p.32
- 10) Henri Bosco, *Ibid.*, p.376
- 11) Henri Bosco, *Ibid.*, p.11
- 12) Henri Bosco, *Ibid.*, p.142
- 13) Henri Bosco, *Ibid.*, p.108
- 14) Henri Bosco, *Ibid.*, p.43
- 15) Henri Bosco, *Ibid.*, p.140
- 16) Henri Bosco, *Ibid.*, p.141
- 17) Henri Bosco, *Ibid.*, p.44
- 18) Henri Bosco, *Ibid.*, p.105
- 19) Henri Bosco, *Ibid.*, p.105
- 20) Henri Bosco, *Ibid.*, p.213
- 21) Henri Bosco, *Ibid.*, p.381
- 22) Henri Bosco, *Ibid.*, p.44
- 23) Henri Bosco, *Ibid.*, p.381
- 24) Gaston Bachelard, *La Poétique de l'espace*, PUF, 1974 pp24-42
- 25) Henri Bosco, *Ibid.*, p.229
- 26) Henri Bosco, *Ibid.*, p.407-408
- 27) Henri Bosco, *Ibid.*, p.336
- 28) Henri Bosco, *Ibid.*, p.117
- 29) Henri Bosco, *Ibid.*, p.348
- 30) Henri Bosco, *Ibid.*, p.135
- 31) Henri Bosco, *Ibid.*, p.215
- 32) Henri Bosco, *Ibid.*, p.229
- 33) Henri Bosco, *Ibid.*, p.229
- 34) Henri Bosco, *Ibid.*, p.152
- 35) Henri Bosco, *Ibid.*, p.215
- 36) Henri Bosco, *Ibid.*, p.63
- 37) Henri Bosco, *Ibid.*, p.348

38) Jean-Pierre Cauvin, *Henri Bosco et la poétique du sacré*, Klincksieck. 1974, p.88

#### その他の参考文献

- エリアーデ, 久米博訳 『太陽と天空神』, 1986, せりか書房  
エリアーデ, 久米博訳 『聖なる空間と時間』, 1990, せりか書房  
エリアーデ, 風間敏夫訳 『聖と俗』, 1974, 法政大学出版局

## Espace du *Mas Théotime*:

— à travers le temps qui circule, la terre et la maison —

Henri Bosco a commencé à écrire le *Mas Théotime* deux mois après l'invasion nazie en France qui l'a énormément indigné. Cela bouleversa le plan de son roman préalablement conçu. Il dit, "Le sujet tourne à la grandeur. Il ne sera plus une mesquine intrigue passionnelle, compliquée à dessein, mais le drame de la terre même aux prises avec l'homme. Il dit aussi quant au mas Theotime que "c'est un personnage, le plus grand de tous."

Dans ce roman, comme dans beaucoup de romans, il y a une histoire, une intrigue compliquée que produisent les relations des hommes-personnages et qui va vers la fin. Mais en même temps dans cet œuvre non seulement beaucoup de pages sont consacrées à la terre, au mas Théotime, aux plantes, au phénomène de la nature environnante, etc. mais ces derniers se présentent aussi sous la forme d'un style et d'expressions particulières épargnés par l'humanisme et dans leur relation intime et étroite avec l'homme. Dans cet article, nous allons voir en examinant concrètement quelques phrases concernant 'le temps qui circule (les saisons)', 'la terre' et 'la maison', les aspects et les ordres sous lesquels ils s'inscrivent dans cette œuvre. Cela renvoie aux deux citations de Bosco soulignées plus haut et fait du *Mas Théotime* une œuvre particulière, radicalement unique : il a créé un univers où l'homme n'est pas au centre du monde. La création de cet univers qui n'a rien à voir avec l'époque et avec la situation dont il souffrait n'était pas une évasion, mais une contestation du monde où l'homme a perdu le contact primordial avec la nature et les choses environnantes et où il se considère au centre et, par conséquent envahit par force les terres où d'autres vivent. Il n'a pas rejoint les engagements de son époque. Il dit "je suis un écrivain qui n'est pas de sa génération." Mais il a fait son engagement à sa manière, et il en était conscient. Cette œuvre nous semble être d'autant plus d'actualité à notre époque que l'on assiste quotidiennement à la dégradation critique de la nature.

Le travail lui-même d'étude attentive de chaque phrase particulière du *Mas Théotime* concernant (nous nous concentrons sur ces trois éléments dans cet article) 'le temps qui circule', 'la terre' et 'la maison', nous permet de nous libérer de l'humanisme et de récupérer la sensation du contact primordial avec la nature et les choses environnantes. Et là reside le plaisir de la lecture de cette œuvre.

En Europe, comme en Orient, il existait une perception animiste et panthéiste de la nature et des choses, mais l'Eglise et plus tard le dualisme cartésien qui a contribué au développement des sciences l'ont niée. Mais Bosco, par sa nature innée, par la nature environnante de l'enfance et par sa lecture des œuvres antiques a une perception du monde similaire à celle qui existait en Europe ancienne, et il en a fait une sublimation littéraire dans le *Mas Théotime*.